名もなき店で手に入れたもの

夢月 那由紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名もなき店で手に入れたもの

【Ｎコード】

Ｎ０２１２Ｉ

【作者名】

夢月　那由紀

【あらすじ】

何か、心の中に悩みを抱えている四人の少年、少女。四人は小学校の頃からいつも一緒で、互いをずっと信頼してきた。だが、互いに依存するあまり、現実を見失いかけていた。四人の全てを知る謎の店主の『未来を変えればいい』という怪しげな言葉を四人は信じ、未来を変えようと、店主に『未来の箱』に飛ばされる。四人の未来を悪くしたものの原因は何だったのか？

○、岡崎　翔（前書き）

自分の学校祭の為に書いた台本を小説版にしたものです
台本をかなり、修正して書いていきたいと思います
台本を意識するあまり、話を簡潔にし過ぎて分かりずらいところが
あったので…
ということで、更新が遅いかなと思います

〇、岡崎　翔

真っ暗な世界。重力などは感じられなかった。あるのは、浮遊感だけ。
そこに一人の男が現れた。男の周りには光が集まっているのか、真っ暗なこの世界に埋もれることはない。
「ようこそおいでくださいました。迷える方々。ここはそんな迷える方々の力にならんとする“店”でございます。ただ、迷いと言っても、人それぞれでしょう。ですから、これから一つの例をご紹介したいと思います。では、ごゆっくり」
それっきり、男の声はおろか、姿すら見えなくなった。再び、真っ暗な世界になる。光など、本当に見えなくなってしまった。

――――あれ？
そう、自分も…と気付いてしまった少年はその世界から、放り出されてしまった。今、見えるのは、真っ暗な世界でも何でもない、自分の部屋のベッドの下にいるらしい体勢の自分の足と落ちた布団。
「夢…」
うなされてベッドから落ちたのか、今の自分は凄い状態だった。
「また、歩まないといけないのか…」
少年は小さく呟いた。
「翔！！　早く起きなさいっ！　何時だと思っているの！？」
翔（しょう）。岡崎翔（おかざきしょう）というのが、少年の名前だった。
「分かってる」

いつもの朝が始まった。何も知らずに怒鳴り散らす親に俺はもう、ウンザリしていた。何が楽しくてこんな人生を送っているのだろう。いっそのこと、不登校にでもなりたい気分だった。学校だって、楽

しくない。少しだけ気が楽なのは、小学校の時から一緒にいる奴らに会うこと。それが唯一の楽しみなくらいで、他には何もなかった。世界も、バカバカしいと思っていたし。
経験値を積んでわざと、意味があると思って戦争をしているのか、それとも経験値などないのか。どちらにせよ、政争を繰り返す大人たちは馬鹿げていると俺は思う。得るものなんて何もない。ただ、色々なものを失っていくだけの戦争。
それと同じで犯罪を犯す奴も分からない。自分の人生だけに支障が出るなら別にどうでもいい。だけど、自分の家族にまで、迷惑をかけると何故、思わないのか。そう言うことを考えないで犯罪を犯す奴らは馬鹿げていると思う。
俺は人を、大人を、世界を、俺と俺が信頼する奴ら以外の全てをバカにしている。
俺は、この世界が大嫌いだ。

〇、森　由希

真っ暗な世界。重力などは感じられなかった。あるのは、浮遊感だけ。
そこに一人の男が現れた。男の周りには光が集まっているのか、真っ暗なこの世界に埋もれることはない。
「ようこそおいでくださいました。迷える方々。ここはそんな迷える方々の力にならんとする“店”でございます。ただ、迷いと言っても、人それぞれでしょう。ですから、これから一つの例をご紹介したいと思います。では、ごゆっくり」
それっきり、男の声はおろか、姿すら見えなくなった。再び、真っ暗な世界になる。光など、本当に見えなくなってしまった。

———あれ？
少女は、自分の掌を見て、気付いてしまった。自分は見えている。自分は真っ暗なこの世界に飲み込まれていない…と。気付いてしまっては最後、少女はその世界から放り出されてしまったのである。
「きゃあ！？」
目を覚ますと自分がどこからか落ちてきたかのように布団の上でバウンドし、すぐ横にあった本棚から本が落ちてきた。
「夢、かぁ…」
顔の上に乗った本を避けながら、一番に当たった鼻を心配しながら、起き上がった。
それにしても、自分が今見ていたものは夢だったのか…鮮明ではなかった。むしろ、非現実的。最近の自分はどこかおかしいのだろうか？　現実にはありえないものばかりが見えてしまう。
「とりあえず、着替えよう」
クローゼットを開けると異次元、何てことが起こっていないのは自

分が現実にいる証拠。一つ一つ、慎重に考えなければならなくなっている。やはり、自分はどこかおかしい。だが、こんなこと誰かに相談できるものではない。

階段を下りて、居間に向うともう私の家族は朝食を摂っていた。会話など、ない。

私の家は病院で、父と母。それに優秀な兄と姉が一人ずつ。それに比べ私は落ちこぼれのただの少女だった。

「早く席に着きなさい」

「はい…」

冷やかな目線を向けられ、言われる。父も母もまっすぐは私を見てくれない。見てくれるのは主に兄と姉で、父と母は私の表面しか見てくれない。兄と姉は見ているのに……

「由希、昨日も勉強をしていたのか？」

「はい…」

私、森由希（もりゆき）は小さく返事をした。

「その割には成績はいまいち上がらないな。お前は私達の子だ、こんなものが実力な訳ないだろう。お前の兄も姉もいつも成績トップ。家（うち）ではそれが当たり前だ。お前もそれは分かっている筈だ。お前も将来は家（うち）の病院で働くことになるんだ。それなりの実力がなければ困る」

「はい…」

言いたいことがあっても言えない。いつも圧し負けてしまう。

脳裏で父が「勉強しろ、勉強しろ」と言っている場面が映る。それはまるで私を呪っているかのように冷たく、低い声。情など、感じられない。そうよ、父は私など愛してくれてはいないのよ。私みたいな出来の悪い子、いらないのよ。

勉強しろ、勉強しろ、としか言わない私の親。私の話なんて一切聞いてくれない。そんな親は大嫌いだ。

私にだってやりたいことがある。医学の道になんて進みたくはない。それを言いたいのに、言おうとすると、どんどん父が冷たい言葉を浴びせてくる。言える訳がない。何て理不尽な世界だろう。こんな世界、大嫌いだ。逃げ出してしまいたい。

そう思うのなら、家にでも引きこもっていればいいのだけど、私には小学校の頃から仲の良い親友たちがいる。だから何とかまだここにいるの。信頼できる親友。こんな世界でも信頼できる人たちがいた、それだけで私達は仲良くなった。少しずつ、共感の出来る寂しさに埋まっている人達だと知ったから。

〇、新田　真菜

真っ暗な世界。重力などは感じられなかった。あるのは、浮遊感だけ。
そこに一人の男が現れた。男の周りには光が集まっているのか、真っ暗なこの世界に埋もれることはない。
「ようこそおいでくださいました。迷える方々。ここはそんな迷える方々の力にならんとする“店”でございます。ただ、迷いと言っても、人それぞれでしょう。ですから、これから一つの例をご紹介したいと思います。では、ごゆっくり」
それっきり、男の声はおろか、姿すら見えなくなった。再び、真っ暗な世界になる。光など、本当に見えなくなってしまった。

———あれ…
少女は自分の姿は自分で見えているのに…と不審に思った。しかし、次に気付いたときにはその場から放り出されてしまった。何か、気付いてはいけないことに気付き、それを忘れさせるかまたは、完全に悟らせないかのように……
「いったぁ…」
目を覚ますと自分は何故かベッドの上ではなく、下にいた。頭に血が上りそうな体勢になって、いったいどのくらい眠っていたのか。
「夢…？　今の…」
逆さまになった状態から体勢を戻し、起き上がる。寝ぐせで暴れ放題になった髪を手ぐしで軽く整えながら、ついさっきまで見ていたことを脳内で巡らせた。
「あれは…」
「何、朝っぱらから大声出してんだよ」
バッとドアのほうに視線を向けると、一人の青年が立っていた。

「兄さんっ、勝手に入ってこないで！　っていつも言ってるで、しょっ！」
語尾の方で力を入れ、それと同時に手元にあった枕を顔面めがけて投げつける。それを予測していなかったのか、“兄さん”と呼ばれた青年は見事顔面に枕を受けた。
「何すんだよっ！　真菜！」
「煩いっ！　何しに来たのよ！」
真菜。新田真菜というこの少女は朝から元気過ぎるほど、大きな声を張り上げて兄であるこの青年に抵抗した。いかにも意地悪そうに笑う、この青年に。
「あ、そうだ。遅刻するから起こして来い、って父さんが」
「じゃ」と半ば逃げていくように枕を投げ返し、真菜の兄は部屋から姿を消した。真菜は兄を睨みつけ、返ってきた枕を今度はベッドの上に投げつける。

兄さんは意地悪だけど、友達に対してはとても優しい人だ。それは初めから知っている。顔を合わせればいがみ合っているけれど、嫌いな訳じゃない。どちらかというと嫌いなのは……――――
「いつまで寝ているつもりだ。少しは兄を見習ったらどうだ」
すぐに毒づいてくるこの父親の方だった。兄さんは意地悪だけど話しやすい。だけど、父さんは話を聞いてくれないから嫌いだ。いつもあたしと兄さんを比べてはあたしを蔑む。あたしを褒めてくれたことはない。見ているのは良い所じゃなくて必ず、悪い所。母さんは小さいころに亡くなったから、話を聞いてくれる大人は家にはいない。
「全く、勉強は出来ないわ、早起きはしないわ…どうして兄妹なのにこんなに違うんだか…」
「父さん、そんな言い方はないよ」
大人じゃないけど、兄さんは一応はあたしの味方でいてくれる。だから、少しばかりは気が楽というか、落ち着くというか…

「いいよ、兄さん。あたしの出来が悪いのは本当でしょう？　行ってきます」
「真菜、朝ごはん」
「今日はいい」

今日は朝から最悪な日だ。朝ごはんなんて、食べたい気分じゃない。兄さんに叩き起こされるのは日常茶飯事で嫌だとか思ったり、鬱陶(うっとう)しいなんて思わない。父さんに小言を言われるのも日常茶飯事のはずだけど、今日は平気だなんて思えない。むしろ、小言なのに今日のが一番きつかった気すらするのは、気のせいだと思いたい。
兄さんは一応はあたしの味方だけど、完全に、な訳じゃない。完全にあたしの味方なのは、小学校の頃から仲良くしている三人の親友だけだ。何でも話せて、相談できて、同じような悩みを持っているから、一番励みになる答えを出してくれる。家族の兄さんより、信頼できる友達。だからあたしはこの世界でも頑張って生きていられる。

〇、永井　広

真っ暗な世界。重力などは感じられなかった。あるのは、浮遊感だけ。
そこに一人の男が現れた。男の周りには光が集まっているのか、真っ暗なこの世界に埋もれることはない。
「ようこそおいでくださいました。迷える方々。ここはそんな迷える方々の力にならんとする“店”でございます。ただ、迷いと言っても、人それぞれでしょう。ですから、これから一つの例をご紹介したいと思います。では、ごゆっくり」
それっきり、男の声はおろか、姿すら見えなくなった。再び、真っ暗な世界になる。光など、本当に見えなくなってしまった。

――――どこだ、ここ…
少年は無我夢中で自分がどこにいるのかも分からずに走った。行く宛てもある。もちろん、自分の家――――自室だ。今いるこの場所からどこへ向かえばいいのかは分からない。ただ、本能か、じっとしていられない少年だった。
やがて、少年の姿は真っ暗闇に飲み込まれ、だんだんと薄くなり、消えていってしまった。
「うわぁ！？」
魘(うな)されたのか、少年は急に起き上がった。あまりの勢いに起き上がるだけではなく、あろうことか立ちあがってしまった。
「痛てぇ！！」
布団の上に立ちあがった少年の顔面には見事に照明がクリーンヒットした。触れた照明が揺れ動き、左右に揺れ、小さな埃(ほこり)が舞っている。
「何だ、夢か」

呑気なのか、ぶつけた顔面を掌でさすりながら呟いた。
「何で、立ったんだか…アパートなんだから天井低いのいつもで分かっているのによぉ」
小さな部屋に薄い布団を引いた少年の部屋にはたくさんの荷物が溢れていた。起きたばかりの少年がカーテンを開けなければ、部屋はいつまでも暗いまま。少年は欠伸を噛み殺し、窓辺に近づいた。シャッ…とカーテンを開ければ、眩しい朝日が射し込む。
「さて…」
少年は『永井』と書かれたネームがついた制服に目を落とし、それを手に取った。
永井広。これが少年の名だ。広はもぞもぞとそれに着替えた。着替えが終わると部屋の片隅にある仏壇の前に座り込んだ。写真が、二つある。男性と女性の写真で、両方が満面の笑みを浮かべている。
「おはよう、父さん、母さん。今日は変な夢を見たよ。でも凄い非現実的で、正夢になんてなる訳ない夢だったんだ。オレさ、非現実的って一番嫌いなんだよな…父さんと母さんなら分かってくれるだろ？　じゃあ、今日も元気に行ってくるよ」

オレにとっては、朝起きて家の中の全てのカーテンを開けることが、仏壇に手を合わせることが日課になっている。それをやってきて、もう三年くらいたったのだろうか…近くに親戚のいなかったオレはここに住み続けることを言い張った。ここからは離れたくはない。ここから離れたら、信頼できる人がオレの近くにいなくなる。父さんと母さんが小さい頃、大好きだった、親だからこそ、信頼できた。だけど、父さんと母さんがいなくなったとき、食べることも何もしなかったオレを必死に慰めてくれた親友が三人いた。それだけで俺はここから離れることを嫌がり、ここに残ったんだ。その三人を、凄く信頼していたから。こいつらならオレを裏切るようなことはしない。
いつもバカやって笑い合って、冗談言って半分喧嘩になってもすぐ

に仲直りして、全ての感情を四人で分けあった。
ぽっかりと空いたオレの中の穴を埋めるくらいに三人はオレにとって大きな存在になっていた。父さんと母さんのように絶対、失いたくはない存在に。
だから三人を護る、なんてオレには言えないけれど、もう大事な人を失いたくはない気持ちがある。

一、放課後

今日も一日、学校が終わったチャイムが鳴り響いた。
ぞろぞろと帰路に着く者、学校に残り部活に励む者、掃除を済まそうという者。それぞれ各々の行動をしている。この四人は幸いなことに掃除がなく、部活に入っていないため、帰路に着いていた。
「今日もやっと終わったー！」
肩に鞄を掛けた広が外に出て思いっきり、伸びをした。その表情は清々しい。
「広がそんな疲れた訳ないでしょ。ほとんど居眠りしていたじゃないの」
ぐさり、と広にくぎを刺したのは、軽くウェーブがかった髪を揺らす真菜だった。一見、冷やかに見下ろしているように見えるが、どことなくその中に優しさが混じっている。
「真菜、そんなグサッと言ったら広が可哀相よ。いくら真実だとしても」
真菜より酷いことをさらりと言ってのけたのは由希だった。にこやかに笑うその背後にはどす黒オーラがある。
「いーから、帰るぞ」
何気なく、いがみ合っている三人をまとめたのは翔だ。四人の中でリーダー的な存在にあり、いざというときは頼りになる。マンガでいうと典型的な正義感の強い主人公、といったところ。

「そういえば、今日変な夢見たの」
と、おもむろに言いだしたのは真菜だ。登校時はそんなことすっからかんに忘れていたのを、今になって思い出した。
「夢？　あー私も見たよ。変な夢」
「そう言えば俺も見た」

「オレも」
四人が一致するのはおかしい、と思い不審に思う。思わずそこから
「どんな夢だったか」と話が進む。
「えーと、何か男の人が一人でいて…迷いが何だとか…？」
真菜のそれを聞くなり、他の三人は足を止めた。その場に立ち尽くす。
「どうかした？」
「それ、私も見たよ。その後、暗闇から放り投げ出された」
「俺も同じだ」
どうしたことだろう。夢に出てきたことを話すと全てを同じだと言う。
暗闇に男がいたことも、それが消えてしまったことも、そして最終的には投げ出されてしまった。
――――オレは放り出されていないんだよなぁ…

一人、広は自分だけ最後が違ったことに不信感を抱きながらも歩いていた。なかなか三人の話に入れず、一人で先にずんずん進むと不思議なものを見つけた。小さな、小屋のような店を…――――
看板には“店”とだけが書かれている。
「おーい、ちょっと見てみろよ」
何だかこの空気には耐えられない、と広は不思議なものを見つけると陽気な姿を装って他の三人に話し掛けた。
「何？」
「この店」
そう言って目の前に見える店を指で示す。
「“店”？」
普通、店に店とは書かないだろう、と翔は顎に手を当てながら言った。
「今日は変なことばかり…本当にここ、お店なの？」
今日は朝から夢でありながらも現実には有り得ないことばかりが起

き、困惑気味の真菜。それに加えて今日の朝は父の小言で嫌に始まったのだ。精神的に疲れているのだろう。
「入ってみたいんだろ、どうせ」
「面白そうとか思っているでしょ」
「別に？　面白そうか？」
あれ意外だな、と翔は物珍しいように広を見つめた。
何か変なものでも食べたのか、それとも熱でもあるのか、と広の額に掌を当てる。だが、「熱はないっ！」と手を払われる。
「お前が何か見つけて俺達に伝えるのは興味があるからだろ？　いつもそうだ。今更そんな嘘が通じるとでも？」
他のそこらへんのやつらといっしょにするな、と翔は付け足す。
「今日は、違う」
「はぁ？　まぁ、いいや。入ってみようぜ？」
「そうだね、暇つぶし暇つぶし」
ぐいっと背中を真菜と由希に押され、広は店の中へ足を踏み入れて行った。その後に翔も続く。
四人は知らない。傍から見れば、四人が急に消えたように見えていたということを……――――

二、店

「いらっしゃいませ」
小さな扉を四人が潜(くぐ)ると一人の男がいた。黒い衣服に身を包んだ一人の男が。
「あのぅ…」
由希が勇気を振り絞ったように一歩前に出るとおずおずと問うた。
体を上手く動かせないのは、この人に近づいてはいけない、と危険信号が発せられていた気がしてならなかったから。
「どうしました？　そのようなところで立ち止まって…どうぞ、お入りください」
ニコォ…と妖しげに口角を上げるその人物に益々四人は恐怖を覚える。
「は、はぁ…」
あまり乗り気ではないようにビクビクしながら四人は店の中に足を踏み入れた。
四人の目の前にいる者は間違いなく“人”であった。だが、店に並べてあるものは何とも不気味な、呪われそうなこの世のものとは思えない代物だった。今にもどろどろと溶けてしまいそう。
「あのぅ…ここって…？」
「店です」
きっぱりと言い切るその男に真菜はあっけらかんとした。
「いや、だから何の店なんですか？」
「店です」
この人はどれだけ幼稚なのか、と四人は呆れた。言葉の意味を理解していないのではないだろうか、それとも本当に真面目に答えているつもりなのか…
「何を売っているのですか？」
これは聞かなくても分かる気がするが、どうもあのような不気味な

趣味を持っているものがいるとは思えない。それとも自分達の予想通り、この不気味がものが商品なのだろうか。
「売っている…そうですねぇ…売っているというのは不適切ですが、売っているものは“未来”でしょうか？」
いや、聞いているのはこっちなのだから疑問符で返されても困るのだが、誰もそれを口にする者はいない。余計なことを喋れば、一生生きて帰られないんじゃないか、そういう恐怖を感じている。
「未来を売る、って…」
「まぁ、厳密に言えば“未来を見る・未来を変える”と言ったところですが」
その男は「店って書いた方が人が寄りやすいでしょう？」と付け足す。その笑顔がおぞましい。
「未来なんて見て、どうするんだ？」
それはそれで素朴な疑問だが、広はそれ以上のことを考えられないのか。先ほどこの男が言ったことをきちんと聞いていなかったのだろうか？
「言ったでしょう？　未来を変える、と…それに貴方達はこの店に来るように仕向けられたのです」
「誰に？」
「私ですよ。今日の夢…覚えていませんか？」
さっきから何度もこの男は不気味に笑う。
四人は“夢”と聞くとついさっきまで話していたことを思い出した。真っ暗闇に浮かんだ一人の男のことを。自分の姿が見えると気付いた時点で放り出された夢のことを。
「じゃああれは…」
「夢なんかじゃありません。私が暗示したのです。…この店には決まった人しか来ることができません。決まった人しか、見ることはできません。私は貴方達に迷いがある、と思ったからここに来るように仕向けたのですよ。迷いがなければ、来ることはできませんから」

前言撤回、この人物は普通の人間なんかじゃない。普通の人間が暗示など掛けられる訳がない。それに、「仕向けた」ということは自分達の何かを知っている。たぶん、過去も今も未来も、全て知っているのだろう。これ以上に断言できるものはない。

「バカなこと言うなよ…人間が暗示なんて出来る訳ないだろう。他人の心を読める人間なんている訳ない」

「だから、私は人間ではないのですよ。これで納得するでしょう？」

この人物の口からいくら「人間ではない」と聞いても広は信じる気になれなかった。

広は非現実的なものが嫌いだ。人間ではないものがここにいることが有り得ないことで、信じたくないことであった。

「納得なんかするかよ！　科学が高度発達した時代じゃねぇんだ！　人間じゃない、人間型がここにいるなんて、有り得ねぇだろっ！」

「話が通じないのなら、特別に、実際にお見せいたしましょう」

話が通じない広に最終手段を取ったようだった。先程から何度も、何度も、不気味に笑う。何を考えているか分からない。

「特別に…？」

「えぇ、特別に」

念を押して、そう言った。不敵な笑みを浮かべて。

三、覚悟

「「「「特別に…？」」」」
あまりに念を押す言葉に四人は声を揃えて確認した。
「そうです。特別に」
先程から何度その言葉を言うのだろう。余程、重要なのだろう。
「特別ってどういうことなの？」
「その人の人生はその人だけのもの。ですから、その人の未来は原則としてその人にしか見せられないのです。ですが、貴方達の未来は他の人達とは違う。貴方達の未来は貴方達、四人が揃っていなければ成り立たないのです」
何か引っかかる言葉だった。他人が関係してはいけない未来に何故、他人が関係してしまっているのか。そして何故、関係してはいけない他人がいないと自分達の未来は成り立たないのだろうか。
「バカバカしいっ！　未来なんて今、知っていいものじゃないだろっ！　あんただって、人生には他人が関係していいものじゃない、って言ってただろ！？」
広は話を聞いてなかったのか、それとも非現実的なことが嫌いなのが本能のまま口を動かせているのか。
「聞いていなかったのですか？　貴方達は特別なのですよ。こう話しているのも時間の無駄なだけですからね、とっとと行ってもらいましょうか」
「待って！　…私達の未来はどうなるの？　そこまで言うってことは尋常じゃないんでしょ？」
「由希！？」
広は止めるように由希の肩を掴むと、叫んだ。
「広はいつまで現実逃避してるのよ！？」
棘のある言葉だった。自分は逃げているつもりはない。むしろ向き合っているつもりだった。それでも周りはそうは見てくれないのか。

「オレは…逃げているつもりは、ない」
「つもりでしょ！？」
いつもはお淑やかな由希が怒鳴っている、肩を震わせながら怒っていることに言われている広はもちろん、翔も真菜も驚いていた。
「これだって現実なのよっ！？　いい加減にしなさいよ、いつまで甘えているつもりなの！　ここで帰ったら広は現実逃避していることになるのよ！　いくらこの人が言っていることが非科学的でも、自分の目を信じなさい！　自分の目で見ている者は現実でしょう！？」
由希は失礼だとは分かっていても、広に向かって指を差し、息を切らせるまでに思うままのことを叫んだ。
「いや、由希…広もあんなことがあったんだしさ。落ち着け、な？」
翔が間に入って由希を宥めるも「翔は黙ってて！」と一喝されてしまった。
翔には、どうしてそこまで由希がむきになっているのか分からなかった。いつもの由希からは想像も出来ないし、広をそこまで慕っている訳でもない。確かに親友ではあってもそんなにむきになることはないだろう、と思う。
「じゃあ、翔はどう思うの？　真菜は？　このままでいいと思ってる？　このまま帰っていいと思う？　私はいいと思わないし、このままあの家には帰りたくない。このまま帰ってもいつもと同じ。それなら、少しでも望みがあるなら、変えたいからこの人の言うことを信じてみたい。そう思っちゃダメなの？」
どこで息継ぎしているのだろうか、そう思わせる間がないほどに由希は悲痛な面持ちで主に広に、翔と真菜にも訴えかけた。
翔も真菜も自分の暮らしがこのままでいいなどとは思っていない。だけど広も放ってはおけないし、自分たちもどこかで嘘だろうと、何かの罠だ、と思っている。それを由希はほんの少しの望みに手を伸ばしている。悪いことではない。
「やってみようぜ」

「翔…？」
「由希の言うとおりだ…少しでも望みがあるならそれにすがってみよう」
翔も由希の言ったとおり、少しでも望みがあるなら…そう思っただけだ。
第一、翔にとっても、由希にとっても、真菜にとっても、広にとっても…この四人にとってはこの世界なんてどうでもいいもの。四人が一緒にいれさせすれば、何も構うものなどない、簡単に切り捨てられるもの。四人が一緒なら何も怖くなどない。それが例え、“死”であったとしても…
「何もしないで、こんなバカみたいな世界にいるよりはマシだろう？　四人一緒にいるんだ。何も怖くない。そうだろう？」
そう、何も怖くないんだ。俺らがいなくなっても困る人間なんていやしない。俺らはそういう愚痴を言い合って、慰めあって生きている。親すらも俺らの話を聞かない、愚かな世界のちっぽけな種族だ。と…そう、翔は考えていた。何が正解なんて分からない。だから基準は自分たち。傍から見れば、小さな箱に閉じ籠(こも)る、可愛そうな四人の子供。

四、行く先は未来

「では、貴方達の未来、ご覧になりますか？」
手を前で組み替えて、その男が言った。怪しげにも聞こえたが、四人はそうは考えないことにした。
「未来を変えればいいんでしょう？」
「未来を体験する、ですからね。変えなければ出られませんよ。その覚悟をして下さい」
例え出られなくなったとしても、自分達は世界に必要とはされていない、そう思っている四人には何も感じることのない言葉だった。
「出来るさ、な？」
翔が由希から順に、真菜、広へと目配せして決心を確かめた。
由希は大きく頷き、真菜は由希ほどではないが、うん、と頷いた。
広は少しだけ気が進まないように小さく頷いた。
「では……」
さぁ、と手で一つの扉を示した。スッと細く長い指が扉に向けられる。
扉が開くと輝かしい光が漏れてきた。その光に照らされた男の指先が美しく見えた。
「いってらっしゃいませ」
「「「「いってきます」」」」
四人は振り返らずに輝かしく光が洩れる扉の中に足を踏み入れて行った。

気付くとそこは白い壁が一面に広がっているようなところだった。
四人は一斉に頭を押さえた。
「痛っ…」
思わず、由希と真菜は声を漏らした。広と翔は何とか頭を押さえ痛

みを堪えていた。
「ここは、どこなんだ…？」
見渡す限り、真っ白な空間。窓も扉も何もない。
「ここはただの白い箱の中。出口はない」
突然現れた人物に、四人は不信感を抱く。初めて会う人間に不信感を抱くのは当たり前のことだ。
「貴方は誰？」
「僕に名はないよ。そんなことを聞く人間は初めてだ。でも、もっと面白い質問をしてよ」
その名がない、という人物は不敵に笑みを浮かべる。不思議な感じがする人だった。
「出口がないってどういうこと？」
「それもありきたりでつまらないなぁ…」
「答えろっ！」
その人物は降参のポーズをとり、お遊びのように笑っていた。
「分かったよ。怖い顔をしないでおくれよ。全て話してあげよう」
まるでここにいる人は自分の手駒のように思っている。そんな笑みだ。掌にのっているただの駒。自分の退屈でつまらない人生を少しでも有意義に過ごすため、演出するただの駒。
「ここはキミ達が望んだキミ達だけが生きることのできる世界」
「誰が、望んだって言ったの？　今…」
「何度もつまらない質問をしないでよ。よく聞いていたら聞かなくてもいいことだ。もう一度だけ言うよ、望んだのはキミ達だ」
口元がゆっくりと歪み、言葉を紡ぐ。
「キミ達はキミ達しか信頼できないから、キミ達はキミ達を互いに信頼しあっているから……だから、他の人間なんてキミ達には必要ないのだろう？　だから、ボクがキミ達だけの世界を作ってあげたんだ。この世界には他にも人間はいるけど、他の人間達にはそれ専用の別の箱がある。だから何も心配することはない。キミ達の邪魔をするものは誰もいない。一生キミ達だけで暮らせるんだ。望んで

いたことが叶って嬉しいだろう？」
口元を見ていると、淡々と形が変えられていくのが気味悪かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0212i/

名もなき店で手に入れたもの

2010年10月14日15時47分発行